

ミルトンの頭痛に関する黙示録の脚注

——『失樂園』をさまよう子宮（あるいはヒステリーのヒストリー）——

圓 月 勝 博

『失樂園』のテキストのなかには出産する母の姿がない、ということが1980年代のフェミニズム批評によって指摘された。¹ たしかに、第8巻で描かれるアダムとエバの創造には、いかなる母も関与していない。さらに、創造されたアダムとエバは、樂園のなかでセックスをすることはあっても、² エバが妊娠する気配はない。妊娠を前提としないセックスなどというものが墮落以前の人間生活のなかにあってよいものなのだろうか。『失樂園』の語り手は、エバの妊娠を言葉によって中絶したのである。このように、女性の出産を隠蔽することによって、創造という行為を男性にのみ帰そうとする男性中心主義的政治学が『失樂園』のテキストには書き込まれているわけだ。フェミニズム批評が過去十年間にもたらした斬新な成果を追認するために、これ以上贅言を繰り返す必要などないだろう。

『失樂園』のテキストのなかには出産する母の姿がある、と反論することが本稿の目的なのである。つまり、サタンの頭部から頭痛とともに「罪」が産まれる場面を出産シーンとして読み直すことを提案してみたいのである。まず、サタンを「父」(2. 727)と慕う「罪」が語る彼女自身の誕生をめぐる驚異の物語に耳を澄ましてみよう。

All on a sudden miserable pain
Surpris'd thee, dim thine eyes, and dizzy swum
In darkness, while thy head flames thick and fast

Threw forth, till on the left side op'ning wide,
 Likest to thee in shape and count'nance bright,
 Then shining heav'nly fair, a Goddess arm'd
 Out of thy head I sprung . . . (2. 752-8)

ジェンダー・パニックのなかでの子宮外妊娠であるが、少なくとも「罪」が誕生するこの瞬間、出産する母の役割をサタンが果たしていることを否定する理由はない。驚異に満ち溢れた『失樂園』のなかでもひとときわ奇怪なこのアレゴリーは、「明らかに誤っている」と偉大なる常識人ジョンソン博士に断罪されて以来,³ その細部に十分な批評的関心が向けられてこなかったことが悔しい。フェミニズム批評が常識というものを打ち破ってくれたことを契機にして、『失樂園』のアレゴリーを再読してみることが本稿の目的なのである。この目的を果たすために、ジェンダー・パニックについて歴史的に再考した上で、テキストのなかには書き込まれた身体というものに着目してみたい。なぜなら、上記の短い引用箇所においてだけでも、「頭」という身体部位が二度も繰り返されている上に(754, 758)、この物語が語られているあいだ、サタンと「罪」の近親相姦から誕生した「死」がその槍をサタンの「頭」に向けていることになっており(2. 730)、この出産シーンにおいては、頭痛という局部的の身体現象が戦略的に前景化されているからである。以下の論考は、『失樂園』のこの驚異のテキストに頭を痛めながら、出産する母サタンの頭痛にヒステリーという診断を下すことによって、『失樂園』をさまよう子宮の行方を追い求めつつ、テキストとしての歴史的な身体に脚光を当てることを目指すものである。

『失樂園』のなかのサタンを母として認知することを妨げている最大の理由は、サタンが文法的に男性として再表象されているからである。たしかに、『失樂園』のテキストのなかのサタンは、第1巻の冒頭近くの箇所において「地獄の蛇」として初めて紹介されたときから(1. 34)、一貫して男性代名詞

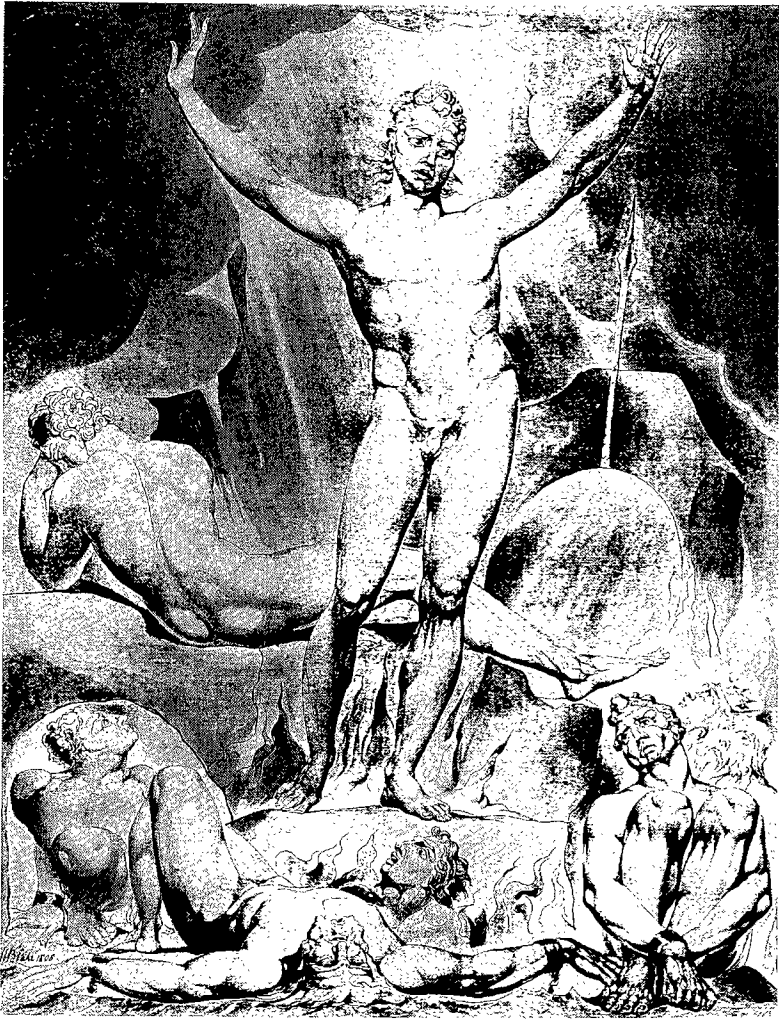
によって指示されている。つまり、この叙事詩の読者は、サタンを男性として思い描くように文法的に誘導されており、その結果として、「罪」がサタンの身体の一部から飛び出してくる場面でも、サタンを母として認知することができなくなっているわけである。

しかし、『失樂園』に再表象される靈的存在のなかには、明らかに、男女両性の境界線が消失している。たとえば、『失樂園』第1巻を少し読み進めていくと、靈的存在が望みのままに自分の性を変更することができることと明記してある(1. 423-4)。天使というものは、本質的に両性具有なのであり、性という身体的境界線による分類をすりぬけていくところに、靈的存在の靈的存在たるゆえんがあるわけである。『失樂園』の一般的読者は、代名詞における文法的性という妨害物に邪魔されて、天使の両性具有というテキストに明記されている事実が見えなくなってしまうがちなのである。もちろん、すべての読者がこの事実を見失ってきたわけではない。たとえば、テキストに書き込まれた文法的性別などという些末な障壁を透視することができた幻視者ウィリアム・ブレイクのような強い読者は、ミルトンを読みながら、天使を両性具有として再表象することができた。ブレイクが描く墮落以前のサタンには、陰部に男根はなく、体つきも柔らかく、性別不明の人体として再表象されている(図版1)。それに対して、ブレイクが描く墮落後のサタンには、陰部に男根が不定形ながら明瞭に描き込まれ、体つきも筋骨隆々として、男性的な人体として再表象されている(図版2)。ブレイクが描く両性具有であったサタンの男性化する身体こそ、『失樂園』の墮落した読者を蝕む近代文化の想像力の固定化を再表象するものなのである。サタンの性別に関する文法的常識を超えたブレイクの思考は、『失樂園』に書き込まれた身体観の再考を私たちに促すものと言えよう。

事実、17世紀の知的世界においては、男女の性別が固定されたものとは考えられていなかった。この点で興味深い記述を示してくれるテキストの一つに、医者として当時の医学的言説を知悉するサー・トマス・ブラウンの『伝



図版1 William Blake, *Satan in his Original Glory*



図版2 William Blake, *Satan Arousing the Rebel Angels*

染性謬見』(1646年)の第3巻17章「野うさぎについて」がある。野うさぎに関してブラウンがこだわる問題は、野うさぎに性転換が起こるかどうかという問題である。ブラウンの『伝染性謬見』は、巷に流布する誤謬を正すことを目的とした啓蒙的著作であるから、私たち現代読者は、当然、ブラウンが自然界における性転換などという荒唐無稽な考えを一蹴するものと期待する。しかし、あにはからんや、博覧強記と温厚篤実をもって鳴るブラウンは、野うさぎに性転換が起こることを再確認するにとどまらず、エンペドクレスやティレシアースの例を引きながら(野うさぎと神話の人物をさりげなく並べるところがブラウンの心憎いところだ)、それが人間にも「観察できる」ことを論じ始めるのである。17世紀イングランド最大の常識人(あるいは単なる奇人)ブラウンの融通無碍なる議論は、現代読者の期待などというものを易々と裏切って、17世紀イングランド文化の驚異の世界に私たちを誘うのである。

性転換というものが自然界全般に「観察できる」ものであることを主張するブラウンは、二つの解剖学的根拠を挙げる。まず、野うさぎにおいても人間においても、受精した子宮の「開口部」が閉じるという事実である。すなわち、妊婦の閉経を子宮の消失として解説/誤読するのである。もう一つの根拠は、男性に見られる「肛門のあたりに観察できる穴というか空洞」である。すなわち、男性の身体にも子宮の痕跡が「観察できる」のであり、男性のなかにも「女性的特質」が内在しているということが主張されているのである。⁴ ブラウンによれば、女性の身体から子宮が消失することもあれば、男性の身体に子宮の痕跡を「観察できる」こともあるので、男女の身体器官における性別というものは、自然状態において本質的に存在しないということになる。

女性の身体に睾丸はないのだから、やはり男女の身体器官における性別は存在することになるのではないかと鋭敏な現代読者なら反論するかもしれない。残念ながら、17世紀の身体観においては、女性の身体の内部にも睾丸は

存在するのである。たとえば、トマス・ウォートンの『アデノグラフィア』(1656年)は、緻密な解剖学的成果に基づいてラテン語で執筆された腺研究の画期的な労作であり、近代医学形成途上の重要な里程碑として最近とみに再評価の気運が著しいが、そのなかでも依然「女性睾丸」の存在が認められている。もちろん、近代に大きく足を踏み入れたウォートンにとって、「女性睾丸」のような非機能的な身体器官の存在は、できることなら否定したいものなのだが、その明確な解剖学的証拠がつかめないのである。そこで、擬似近代医学者ウォートンは、「女性睾丸」を「男性にもある乳首のような」ものとする見解を紹介して論を閉じてしまうのである。⁵しかし、ウォートンのこの説明を聞いていると、そう言えば、どうして「男性」にも「乳首」があるのだろう、と奇妙なことをつい考え始めてしまう。本質的に男女同一の身体的性から不規則に派生する三つの文化的性(男性、両性具有、女性)を想定する17世紀の1セックス/3ジェンダー・システムが不自然であるのと同じように、男女の二つの身体的性と規則的に整合する二つの文化的性を想定する20世紀の2セックス/2ジェンダー・システムも不自然であることに否応なく気付かされるのである。性転換手術が合法化された現代社会において、あらゆるセックス/ジェンダー・システムが文化的構築物であると理解することは、以前ほど困難なことではないであろう。女性として生まれた者だけが子どもを産める、などという女性中心主義的な硬直した近代西洋文化の発想は、『失樂園』のテキストにおけるサタンの出産を解読するためには、徹底的に脱構築されなければならないのである。

『失樂園』におけるサタンは、「罪」を出産するとき、女性になっているのである。富島美子の見事なヒステリー文学論の書名を借りて、サタンに「女がうつる」状態になっていると言ってもよいだろう。⁶事実、ミルトンの言説が再表象する男性たちは、女性という他者の性が自分たちに伝染するという恐怖に怯えている。たとえば、ノアの洪水以前の人類が果てしなく墮落し始める光景を目のあたりにしたアダムは、自分の子孫の墮落が「女から始ま

る]ものとして理解しようとするが(12. 633), アダムに神の真実を告げる天使ミカエルは、「それは男の女々しい(*effeminate*)気のゆるみから始まるのだ」と微妙だが重要な修正を加える(12. 634)。「女々しい」という言葉は、現代ならば、一つの比喩的表現として理解されているが、ミルトンの世界の男性は、少し気をゆるめると、実際に女性になってしまうらしい。「女々しい」という言葉は、「女々しく妻を溺愛する為政者の統治」とか「宮廷の軟弱な女々しさ」という言い方で、⁷ 王党派を執拗に攻撃するミルトンの散文のなかにも頻出する。1630年代を代表するピューリタンの闘士ウィリアム・プリングが『役者懲罰』(1633年)という浩瀚な演劇批判書によって筆禍事件を起こし、内乱勃発直前の宮廷文化と激しい確執を醸し出しながら、長期議会による1642年の劇場閉鎖の理論的根拠を提出していたことは、文学史においてもよく知られた事実だが、『役者懲罰』が指摘する劇場の「悪魔」性の一つに、演劇を「女々しい」ものしている男優の女装の問題があったことをここで思い出してもよいだろう。⁸ 男女の文化的役割分担を重んずるプリンおよびその後継者ミルトンのようなピューリタンたちは、華やかな服装で人生の演劇性に興ずる宮廷文化が推進する男女の性別の混乱のなかに、悪魔の誘惑による人類の墮落のまがまがしい政治性を見ていたのである。『失樂園』のテキストにおいて、「女々しさ」という言葉は、決して単なる比喩ではない。

しかし、このように女性化されたサタンは、どうして「罪」を下腹部からではなく頭部から出産するのであろうか。子宮というものが下腹部から頭部に「うつる」ものであることが示唆されているのである。もちろん、夙に指摘されてきたように、誕生した「罪」が「武装した女神」と呼ばれることから明らかなように(2. 757), 『失樂園』においてサタンの頭から生まれる「罪」がギリシア神話においてゼウスの頭から生まれるアテーナーにたとえられているということに疑問の余地はなからう。しかし、アテーナーの誕生を語る古代ギリシア詩人ヘシオドスやピンダロスは、ゼウスの反応よりもアテーナーの性格描写に関心を注いでいる。⁹ それに対して、17世紀英詩人ミ

ルトンは、「罪」を出産するときのサタンの頭痛を執拗に書き込むところからこのエピソードを始めている。古典的材源を同定することだけで満足しては、サタンの頭部から「罪」が生まれるという17世紀英文学極め付けの驚異のエピソードを十分に理解したとは言えないのではなかろうか。『失樂園』を17世紀イングランドの文化的構築物として歴史のなかに位置付けるために、その異貌の細部に潜むテキストとしての身体に目を向けよう。

まず、『失樂園』のテキストは、「罪」の出産に際してサタンが感じた「突然の悲惨な痛み」(2. 752)を強調する。すなわち、「罪」というものが頭痛という身体的症候と密接に結びつけられているわけである。この点に関しては、文学史においてミルトンの『失樂園』と並び称せられる17世紀ピューリタニズム文学の傑作バニヤンの『天路歷程』第1部(1678年)の一節が興味深い類似を示している。天国を目指す旅の途上、どのようなときに自分の「罪」を自覚するか、とクリスチャンがホウプフルに質問をする。ホウプフルの答えは、8つの箇条書にして述べられるのだが、「道で善良な人と会ったとき」とか「だれかが聖書を読んでいるのを聞いたとき」などという平凡な答えのなかに、「私の頭が痛み始めたとき」という意表を突く答えが突如として紛れ込む。¹⁰ 自分よりも立派な人物と出会ったとき、自分の至らなさに慚愧たる思いを味わうことは、現代読者にも首肯できるところであるが、どうしてそのような精神的問題が頭痛という身体病理学の問題と同一平面で語られなければならないのだろうか。17世紀イングランドの言説において欠落している境界線は、男性と女性の性的境界線だけではなく、身体と精神の認識論的境界線でもあるらしい。

頭痛と言えば、ミルトンも頭痛持ちであった。『イングランド国民のための第二弁護論』(1654年)のなかで、そのときまでには完全に視力を失っていたミルトンは、国王を処刑したイングランド国民を弁明するだけではなく、自分の失明を天罰だと攻撃する論敵に反論するために自己弁明をも行なっている。ミルトン自身の弁明によると、彼の失明の原因は、天罰ではなく、幼

少時からの勤勉な読書によるものであり、それが「彼の目に有害だったのであり」、その生まれつきの目の弱さに「頭の痛み」(“capitis dolores”)が加わったのであった。¹¹ 失明という自分の身体的現象の解釈をめぐる言葉の戦いを繰り広げるミルトンの言説のなかには、二つの興味深い点がある。第一番目の点は、視力障害と頭痛が密接に結び付けられていることである。『失樂園』のテキストにおいても、頭痛を感じたサタンは、その直後に、「目」が「かすむ」という視力障害を体験している(2. 753)。頭痛とともに出産するサタンの描写には、ミルトンが通曉していた17世紀の医学的言説が周到に書き込まれているのである。第二番目の点は、頭痛を指し示すラテン語として、「痛み」とともに「悲しみ」をも含意する“dolores”という単語が使われていることである。ミルトンの頭痛とは、「痛み」という身体的現象であるだけでなく、「悲しみ」という精神的現象でもあり、身体と精神の認識論的境界線を越境する「悲痛」という記号であったのである。

頭痛持ちと言えば、ミルトンと同時代の女性哲学者アン・コンウェイも「悲痛」としての頭痛に生涯苦しみ続けていた。彼女の頭痛に関しては、当時の錚々たる顔触れが絡み合う。頭痛を治すために水銀服用を続けていたコンウェイに対して、1653年12月10日付の書簡のなかで、今ではケンブリッジ・プラトン哲学者として思想史に名を残す彼女の親友ヘンリー・モアは、水銀などという危険な治療薬の服用を中止して、「神のご加護」を信じて精神を静めるようにと忠告を書き送っている。現代読者の観点から見ると、水銀の服用を中止するようにという忠告は、さすが当代一流の哲学者らしい賢明な判断だと感心するが、その治療の代案として「神のご加護」への信頼という精神論に傾斜していくモアの議論には、文化的違和感を感じずにはられない。精神主義者モアが暗に批判する水銀服用をコンウェイに推奨していた人物は、彼女の主治医であった当代一流の医学者トマス・ウィリスである。コンウェイの臨床例を踏まえたウィリスは、死後出版された論考のなかでも、「頭部の痛みが性器の疾患から生じている場合には」、水銀を服用することが

適切な治療であることを力説しており、水銀服用という薬物治療に関する彼の確信は、当時の医学的常識に基づくものであることが判明する。¹² ウィリスによって水銀がコンウェイに処方されていたということは、彼によって彼女の頭痛の原因が性器の疾患であると診断されていたということを意味するのである。

いよいよ頭部が子宮に結び付いてきたわけだ。17世紀イングランドの医学的言説における頭部と子宮の密接な病理学的関連について、医者兼文学者として17世紀英文学史にブラウンとともに燦然とそびえ立つロバート・バートンに目を向けてみよう。17世紀イングランド文化特有の分類不能性を現代読者に突きつけるバートンの極め付けの奇書『憂鬱の解剖』（著者改訂増補最終版1651年）によれば、「頭部の憂鬱」というものは（「憂鬱」という病理学的現象も身体器官によって区別される）、「脳が冷たくなったり熱くなったりする不調によって一般に引き起こされる」。このような「憂鬱」は、女性に頻繁に観察されるのだが、その病理学的原因は、生理不順に伴う閉経によって「脳」に向かって送り出される「有害な蒸気」であることが実例を挙げて論証される。¹³ 体液循環説に立脚した上で、ジェンダーという境界線を越境しながら、身体と精神の問題を自由自在に往復するバートンの驚異の書物は、17世紀イングランドの医学的言説が構築した脳と子宮の病理学的関係を語って倦むことがない。

体液循環説に基づく脳と子宮の病理学的関係に関する医学的言説を見事に展開した17世紀イングランドの書物は、近年のヒステリー研究において注目を集めるエドワード・ジョーダンの『子宮窒息と呼ばれる病気』（1603年）である。ヒステリーという言葉がギリシア語の「ヒュステラ（子宮）」に由来することを今さら持ち出すまでもなく、女性の憑依的精神錯乱は、「憂鬱」という病理学的現象の範疇のなかで、¹⁴ 古くから子宮という女性特有の身体器官と関連づけられてきたのだが、この「子宮窒息」という病気を迷信的な魔女信仰から解放するために、子宮が脳に与える悪影響という観点から近代

病理学的説明を与えようと試みた画期的な書物がジョーダンの『子宮窒息と呼ばれる病氣』なのである。ジョーダンの説明によると、脳と子宮の関係には「非絶対的伝達」と「絶対的伝達」という二種類がある。最初の「非絶対的伝達」においては、体温が上がってきたときに「体液が極めて大量に脳に向かって上昇する」。すなわち、バートンの「頭部の憂鬱」論で見たように、「体液」という媒介物をとおして脳と子宮のあいだに影響関係が生ずるのだが、脳と子宮という身体器官の位置関係自体には変化はないので、「非絶対的」な「伝達」として規定されるのである。それに対して、「絶対的伝達」においては、子宮自体の「位置的な動き」が「横隔膜」を圧迫することによって、呼吸困難の状態に陥り、「脳」に集中する「神経」を刺激して、「脳が痙攣を起こす。」すなわち、脳と子宮の位置関係自体に変化が起こるので、「絶対的」な「伝達」として規定されるのである。ジョーダンの病理学的説明においては、子宮という身体器官は、身体の内部を移動し続けていることが暗黙の大前提となっているわけである。これが17世紀イングランドの医学的言説において「女性睾丸」と並んで悪名高き「さまよえる子宮」(“the wandering womb”)なのである。¹⁵

「さまよえる子宮」という17世紀イングランドの医学的言説こそ、『失樂園』におけるサタンの頭部からの出産を説明する概念なのである。すなわち、「罪」を出産するにあたって、男女両性具有のサタンの子宮は、その身体をさまよって頭部に達し、重症のヒステリー症状を引き起こしていたのである。『失樂園』のテキストのなかで、サタンの「頭」が「炎」を噴き出し(2.744)、発熱していたことも上記の17世紀イングランドの医学的言説におけるヒステリー症状と合致している。神に対する反逆を決意した罪深いサタンは、ヒステリー状態のなかで子宮が頭部にさまよって込み、「頭」のなかに自らの「罪」を身ごもってしまったわけである。

サタンの「頭」から「罪」が産まれる場面がアレゴリーであることに異論を唱えるつもりはないが、そこには精神と身体のあいだを自由に往復する

17世紀イングランドの医学的言説が躍動していることを強調しておきたい。同種の出産症例を報告するテキストは、『失樂園』という詩的テキストだけではないからである。たとえば、先ほどコンウェイの親友として本稿に登場したモアは、『靈魂の不滅』(1659年)という彼の哲学的主著のなかでも、断頭台での処刑という「見世物」を見た妊婦が頭のない子どもを出産した症例を挙げながら、そのような異常出産を精神と身体をつなぐ「想像力」によって引き起こされるものと規定している。¹⁶ また、ブラウンおよびパートンによって代表される17世紀イングランドの医者兼文学者の系譜に立つ形而上詩人ヘンリー・ヴォーンの訳業『ヘルメス医学』(1655年)も、恐怖に襲われて思わず手を上げた妊婦が手のない子どもを出産した症例などを列挙しながら、出産に際して「想像力」が「燃え上がる」場合に観察される心身運動関係に異常な関心を示している。¹⁷ サタンが「罪」を出産するというアレゴリーは、精神と身体の運動関係を構築する17世紀的「想像力」の産物なのだ。

すると、サタンの身体症状の再表象は、精神的な意義をも担っていることになる。この点で、注目に値するテキストの細部は、「罪」がサタンの頭部の「左側」から誕生したと明記してある点である(2.755)。「左側」からの女性的分身の誕生は、エバがアダムの脇腹の「左側」から誕生したという記述と符号する(8.465)。すなわち、「罪」の誕生は、エバの誕生によって掉尾を飾られる天地創造の転倒を暗示しているのである。事実、「罪」の誕生を描くテキストのなかには、サタンの「頭」から「炎」が噴き出す前に、「暗闇のなかで／めまいをしながら泳ぐ」という言葉が書き込まれており(2.753-4)、水と炎が「罪」の誕生をもたらしたことが示されている。『失樂園』の世界のなかで、水と炎によってもたらされるものと言えば、言うまでもなく、ノアの洪水によって予表される炎による終末である(11.900)。要するに、サタンの頭痛の再表象は、黙示録的な意義をも担っているのである。

事実、墮落したアダムとエバの樂園追放の場面で終わる『失樂園』のなか

では、そのテキストが終わりに近づくとつれて、世界の終末に際して「頭」に訪れるであろう罰に対する強迫観念が先鋭化していく。たとえば、エバと人類史上最初の夫婦喧嘩を体験した墮落後のアダムは、動物や鳥などの被造物のあいだで始まる「戦い」を初めて目撃したとき(10. 710), 「この新たな栄光溢れる世界の終末」(10. 720-1) に怯えながら次のように詠嘆する。

O voice once heard

Delightfully, *Increase and multiply*,
 Now death to hear! for what can I increase
 Or multiply, but curses on my head?
 Who of all Ages to succeed, but feeling
 The evil on him brought by me, will curse
 My Head (10. 729-35)

二度も繰り返される「頭」への言及がアダムの自己の身体の特定位点への異常な関心を示している。墮落後のアダムにとっては、「産めよ、増やせよ」という創世紀第1章22節に基づく神の祝福が彼の「頭」に降りかかるであろう「呪い」の増殖を意味するようになってしまっているのである。この一節のなかでも、出産に帰結する人間の生殖行為と「頭」に訪れる災厄が密接に結び付けられていることは、あらためて『失樂園』のテキストのなかでの頭部と子宮の関連性を明示していて興味深い。ミルトンの言説においては、「頭」と生殖が終末をもたらす鍵を握っているのである。

しかし、どうしてアダムにとって、「世界の終末」に際して罰が訪れる身体部位は、他の身体部位ではなく「頭」でなければならないのであろうか。アダムのこの強迫観念は、原福音とも呼ばれる創世紀第3章15節に基づく蛇に対して下された神の裁きをアダムが誤解していることが原因なのである。¹⁸

Between Thee and the Woman I will put
 Enmity, and between thine and her Seed;
 Her Seed shall bruise thy head, thou bruise his heel. (10. 179-81)

『失樂園』のテキストにおける頭部と子宮の密接な関連は、上記の原福音のなかで告げられた「頭」を砕く「女の末裔」という終末論に依拠するものであったことがここで判明する。エバと険悪な状態に陥っている墮落後のアダムは、「女の末裔」が砕くことになる「頭」とは、彼自身の「頭」を意味するものであると単純に勘違いをしているわけである。すなわち、墮落後の罪悪感に苦しむアダムは、自分を蛇＝悪魔と同一視してしまっているのである。神の祝福と裁きの意味を見失った墮落後のアダムには、終末に際して砕かれることになる「頭」と関連して語られている「踵」(“heel”)というもう一つの身体部位が見えなくなっている。文字どおり地に足がつかない精神状態になっているわけだ。

「頭」と「踵」という二つの身体部位の関係の精神的意味は、第6巻で天使ラファエルによって墮落以前のアダムに対して語られた天国の戦いのなかで既に暗示されていた。天使ラファエルが語る天国の戦いの物語のなかには、第2巻のなかで描かれたサタンの頭痛に加えて、『失樂園』のなかのもう一つの頭痛の再表象があるからである。天国の戦いが最終局面にさしかかったとき、墮天使たちが発明した大砲に圧倒されて危機的な状況に追い詰められた正しき天使たちは、起死回生的手段として、あらゆる武器を放擲するという捨て身の戦法で、天国の山を墮天使たちに向かって投げ始める。正しき天使たちが投げつけた山は、「空中」を飛んで墮天使たちの「頭」に命中し、武器を突き破って彼らを「砕き」、「痛み」に苦しむ墮天使たちは、「悲痛な」(“dolorous”)なうめき声を上げるのである(6. 653-8)。

「悲痛」というミルトンの頭痛の記号が登場することに注意しよう。天国を自壊せしめる壮絶な戦いのなかの頭痛の再表象は、第2巻のサタンの頭痛

と同じく黙示録状況を示唆している。なぜなら、墮天使たちの頭痛を引き起こした正しき天使の捨て身の奮戦は、戦車に乗ったキリストの最後の出陣のきっかけとなり、永遠の世界における神と悪魔の抗争は、文字どおりの終末を迎えるからである。たしかに、このエピソードは、第2巻のサタンの「頭」からの「罪」の出産と並んで、荒唐無稽な『失樂園』のなかでもひととき荒唐無稽なものである。『失樂園』の読者は、この場面においても、サタンの出産シーンを解釈するために必要であった身体と精神の境界線を自由自在に越境する17世紀的「想像力」を駆使することが要求される。第6巻の天国の戦いの最終局面で強調されるものは、墮天使の「頭」を打ち砕く「山」(“Hill”)なのである。このエピソードの描写は、次のように始まっていた。

Thir Arms away they threw, and and to the Hills
 (For Earth hath this variety from Heav'n
 Of pleasure situate in Hill and Dale)
 Light as the Lightning glimpse they ran, they flew
 From thir foundations loos'n'ing to and fro
 They pluckt the seated Hills with all thir load . . . (6. 639-44)

“Hill[s]”という言葉が3回繰り返されていた。そして、この荒唐無稽なエピソードは、“Hills”という言葉が再び3回繰り返されて、次のように終わるのである。

The rest in imitation to like Arms
 Betook them, and the neighboring Hills upcore;
 So Hills amid the Air encounter'd Hills . . . (6. 662-4)

「空中」から落下し墮天使の「頭」を砕く「山」(“Hill”)という言葉が何度

も何度も執拗に繰り返される。このエピソードの描写には、明らかに、悪魔の「頭」を砕いて世界の終末をもたらす「踵」(“heel”)を想起させるものがある。

しかし、真の世界の終末を迎えるためには、「山」(“Hill”)が「踵」(“heel”)にならなければならない。『失樂園』のテキストのなかで、「山」(“Hill”)が「踵」(“heel”)に変換される箇所は、1万行を超えるこの長大な叙事詩が最後に繰り出す叙事詩的直喩のなかである。「山」(“Hill”)という言葉の「踵」(“heel”)という言葉への変換は、『失樂園』のテキストが読者に送る土壇場での最後の啓示なのだ。

... from the other Hill

To thir fixt Station, all in bright array
 The Cherubim descended; on the ground
 Gliding meteorous, as Ev'ning Mist
 Ris'n from a River o'er the marish glides,
 And gathers ground fast at the Laborer's heel
 Homeward returning. (12: 626-32)

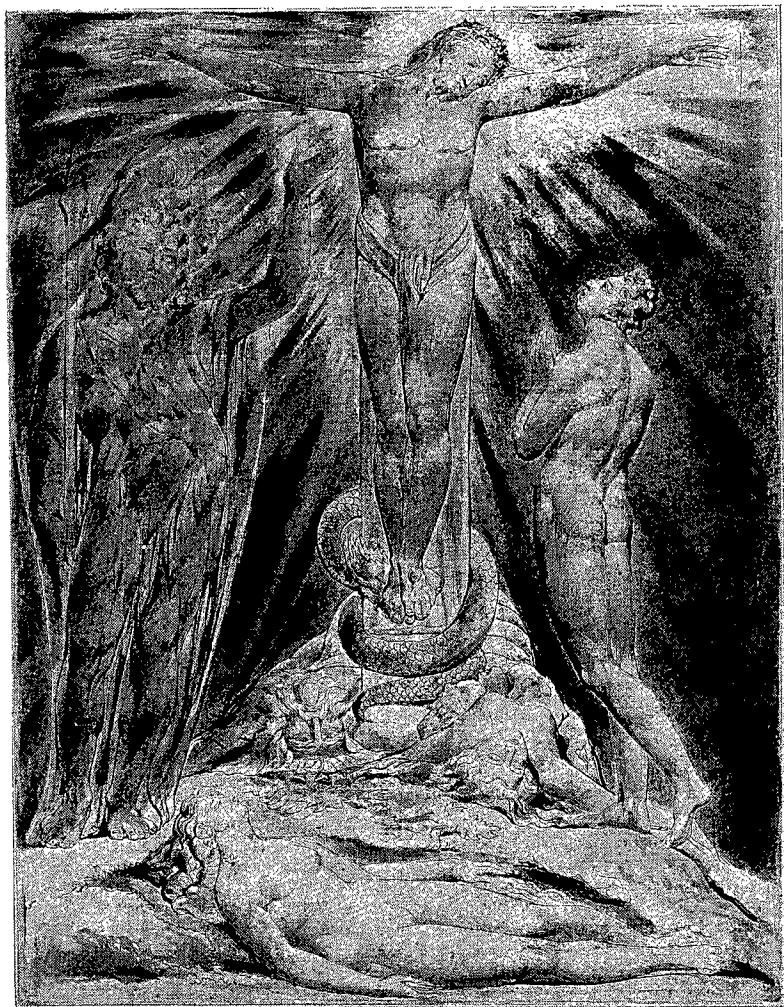
墮落したアダムとエバを樂園から追放するために「山」(“Hill”)から降りてきた智天使たちは、「流れ星のように／空中をとおって」(“meteorous”)というミルトン一流の語源的な言葉遊びによって、先に見た第6巻のなかで「空中」から墮天使たちの上に落ちてきた「山」と二重写しになってくる。さらに、「山」(“Hill”)から降りてきた智天使たちは、「川から立ち昇る／夕暮れの靄」という「蒸気」に喩えられる。しかし、『失樂園』のテキストの最後の場面の「蒸気」は、「立ち昇る」という動詞から読者が期待する「頭」への上昇運動ではなく、意外なことに、「踵」(“heel”)に向かって下降運動を示す。アダムとエバに対する神の裁きは、墮落したアダムの予想を裏切って、

「頭」ではなく「踵」に下されていることが明らかになる。楽園を今まさに追放されようとしている罪に汚れた人間の歩みこそ、終末に際して蛇の「頭」を砕く救済の第一歩となることが人類に対する神の裁きとして示されているのである。

『失樂園』のなかで再表象されたテキストとしての歴史的身体の解読に成功した読者は、ここでもまたブレイクであった。ブレイクの長編預言詩『ミルトン』（1804年？）は、ブレイクが「想像力の下層領域」のなかでミルトンを「足」で受け止めるという着想をめぐって展開される。¹⁹ この出来事に対応する図版を探すと、そこではミルトンが「流れ星」としてブレイクの足に落ちてきている（図版3）。ブレイクにとってのミルトンとは、『失樂園』のテキストの最後の叙事詩的直喩のなかで示された「流れ星」として「踵」に降りてくる神の裁きに他ならなかったのである。さらに、ブレイクが描く『失樂園』第12巻の挿絵「ミカエルが十字架を予言する」のなかでは、『失樂園』のテキストの該当箇所には少しも触れられていない「蛇」が十字架の上に巻きつき、イエスの「踵」を貫く釘によってその「頭」が砕かれている。しかも、これもまた『失樂園』のテキストの該当箇所には少しも触れられていないのだが、怪物らしきものを死産した女性が年老いた男性とともに十字架に巻きつくようにして死んでいる。（図版4）本稿で議論してきた「頭」と「子宮」と「踵」というテキストとしての歴史的身体が見事に図像化されているわけである。近代文化が解体した身体器官の全体性の回復と男女の性別の終末を救済として告げるブレイクの『失樂園』挿絵は、ミルトンの「想像力の下層領域」が持つ歴史的衝撃力から目をそむけてきた現代読者の知的怠惰を叱責して止むことがない。



図版3 William Blake, *Milton*, pl.29



図版4 William Blake, *Michael Foretells the Crucifixion*

注

- *本稿は1997年10月18日に同志社女子大学（京都）において開催された第23回日本ミルトン・センター年次大会において口頭発表した原稿に加筆修正を行なったものである。
- 1 Richard Corum, "In White Ink: *Paradise Lost* and Milton's Ideas of Woman," in Julia M. Walker, ed., *Milton and the Idea of Woman* (Urbana: U of Illinois P, 1988), p. 130.
 - 2 *Paradise Lost*, 4. 736-75. 本稿におけるミルトンの詩の引用は, Merritt Y. Hughes, ed., *John Milton: Complete Poems and Major Prose* (Indianapolis: The Odyssey P, 1957) に拠るものとし, これ以降, 本文中に巻数と行数のみを明記する。
 - 3 Samuel Johnson, *Lives of the English Poets*, ed. by George Birkbeck Hill (Oxford: Clarendon, 1905), 1: 185.
 - 4 Sir Thomas Browne, *Pseudodoxia Epidemica*, ed. by Robin Robbins (Oxford: Clarendon, 1981), p. 226, 231. ルネサンス期のセックス／ジェンダー・システムに関しては, 大橋洋一『新文学入門—T・イーグルトン「文学とは何か」を読む—』(東京: 岩波書店, 1995) 242-3 ページに要を得た解説があるので参照のこと。
 - 5 Thomas Wharton, *Adenographia*, trans. by Stephen Freer (Oxford: Clarendon, 1996), p. 223.
 - 6 富島美子『女がうつる—ヒステリー仕掛けの文学論—』(東京: 勁草書房, 1993). 言うまでもなく, 「うつる」という言葉には「伝染する」, 「反映する」, 「移動する」などの多義的な意味がある。
 - 7 Don M. Wolfe, general ed., *The Complete Prose Works of John Milton*, 8 vols. (New Haven: Yale UP, 1953-82), 3: 421, 571.
 - 8 William Prynne, *Histrion-Mastix: The Player's Scourge or, Actor's Tragedy* (New York: Johnson Reprint, 1972), pp. 178-9. 17世紀イングランドにおける女装に代表される男性の女性化とそれに対するプリンなどの批判に関しては, Laura Levine, *Men in Women's Clothing: Anti-Theatricality and Effeminization 1579-1642* (Cambridge: Cambridge UP, 1994) も参照のこと。
 - 9 ヘシオドス『神統記』925-8 行およびピンダロス『オリュンピア祝勝歌』第7歌 35-8 行を参照のこと。
 - 10 John Bunyan, *The Pilgrim's Progress from This World to That Which Is to Come*, ed. by J. B. Wharey and rev. by Roger Sharrock, 2nd ed. (Oxford: Clarendon, 1960), pp. 138-9.
 - 11 Frank Allen Paterson, ed., *The Works of John Milton*, 18 vols. (New York: Columbia UP, 1931-8), 8: 118-9. 1652年1月1日付のミリウスからミルトンに宛てられたラテン語書簡のなかに見られる「頭痛と目の炎症」に関する言及(18: 264-5)も参照のこと。

- ミルトンのテキストにおける視力障害と下半身生理機能との関連については、画期的なルネサンス身体論集に収められた Michaël Schoenfeldt, “Fables of the Belly in Early Modern England,” in David Hillman and Carla Mazzio, eds., *The Body in Parts: Fantasies of Corporeality in Early Modern Europe* (London: Routledge, 1997), pp. 256-7 も見よ。
- 12 Marjorie Hope Nicolson, ed., *The Conway Letters*, Rev. ed. (Oxford: Clarendon, 1992), p. 91 and n. 1. ちなみに、水銀を服用すると、唾液が異常に分泌し始めるので、体内の悪性物質の代謝が促進されると考えられていた。
- 13 Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy*, ed. by Thomas C. Faulkner, Nicolas K. Kiessling, and Rhonda L. Blair, 6 vols. (Oxford: Clarendon, 1989-), 1: 376, 230. (本文 3 巻の完結を見たこの学術版は、現在、最初の注釈巻である第 4 巻までが既刊。)
- 14 「憂鬱」の別名であるヒポコンデリアとヒステリーの同一視に関しては、Bernard de Mandeville, *A Treatise of the Hypochondriack and Hysterick Passions* (1730), Vol. 2 of *The Collected Works of Bernard de Mandeville* (Hildesheim: Georg Olms, 1981) を参照のこと。
- 15 Edward Jordan, *A Disease Called the Suffocation of the Mother* (Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971), pp. 7-8. ヒステリーの歴史におけるジョーダンの重要性に関しては、ヒステリーをめぐる先駆的名著 Iza Veith, *Hysteria: The History of a Disease* (Chicago: U of Chicago P, 1965), pp. 121-4 を参照のこと。「さまよえる子宮」に関しては、画期的なルネサンス医学的身体論 Winfried Schleider, *Medical Ethics in the Renaissance* (Washington, D. C.: Georgetown UP, 1995), p. 115 も参照のこと。
- 16 Henry More, *The Immortality of the Soul*, ed. by A. Jacob (Dordrecht: Martinus Nijhoff, 1987), pp. 224-5. 17 匹の兔を産んだと称した女性が引き起こした 1726 年の騒動をめぐる文化史的文脈のなかでのモアの「想像力」理論に関しては、Dennis Todd, *Imagining Monsters: Miscreations of the Self in Eighteenth-Century England* (Chicago: The U of Chicago P, 1995), pp. 94-101 を参照のこと。
- 17 L. C. Martin, ed., *The Works of Henry Vaughan*, 2nd ed. (Oxford: Clarendon, 1957), pp. 574-5. 『ヘルメス医学』の原著は、Heinrich Nolle, *Systema Medicinae Hermeticae Generale* (1613) である。モアとヴォーンの歴史的接点に関しては、Frances A. Yates, *The Rosicrucian Enlightenment* (London: Routledge, 1972), p. 185 を参照のこと。
- 18 ミルトンの原福音解釈に関しては、C. A. Patrides, *Milton and the Christian Tradition* (Oxford: Clarendon, 1966), pp. 123-8 を参照のこと。
- 19 David V. Erdman, ed., *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, Rev. ed. (Berkeley: U. of California P, 1982), p. 115.

Synopsis

An Apocalyptic Footnote to the Miltonic Headache: The Wandering Womb (or the History of Hysteria) in *Paradise Lost*

Katsuhiko Engetsu

The aim of this paper is to historicize the allegory of Sin and Death in order to reconsider Milton's *Paradise Lost* in light of our growing critical concern with the history of the human body in the post-feminist age. The episode of Sin's birth (2. 752-8) focuses the account of Satan's bodily changes on his "miserable pain" in the "head" out of which the "Goddess arm'd" was born. The representation of Satan's headache, suggesting the end of the world by water and fire, gives a microcosmic glimpse of the Apocalypse through the discourse on the human body that relates troubles in the "eyes" to headaches. The poet must have familiarized himself with the medico-theological discourse on headaches since he suffered from "capitis dolores" ("headaches") while threatened by the complete loss of his sight, which his opponents considered a sign of the sinfulness of his defense of the regicides. The episode of Satan's headache points to the blind poet's personal experience in his difficult years after the Civil War.

The medico-theological discourse on headaches, however, does not confine itself to Milton's personal experience since it is shared by a lot of his contemporaries, such as John Bunyan in *The Pilgrim's Progress* and Henry More in his correspondence with Ann Conway. Thomas Willis, Conway's doctor, defines her headaches as symptoms of "the Venereal Disease." The connection between the brain and womb—both of which are capable of

producing new beings—in seventeenth-century medical discourses dates through Robert Burton’s *Anatomy of Melancholy* back to Edward Jordan’s classical treatise on hysteria—etymologically signifying the disease of a womb—published in 1603, *A Disease Called the Suffocation of the Mother*. The headache, from which Satan suffers when he gives birth to Sin, proves to be a symptom of hysteria caused by a “wandering womb.” The episode of Satan’s headache shows us not only the interconnection of the internal organs but also “the mutation of sexes,” which Sir Thomas Browne takes for granted in *Pseudodoxia Epidemica*, since the male Satan evidently plays the role of mother when s/he gives birth to Sin. The discourse on headaches in the epic, thus challenging our unexamined belief in the physical, sexual, and moral identity of the human subject, highlights the intriguing issue of the seventeenth-century understanding of the human body.

The obsession with the head and womb in the apocalyptic vision runs through the text of *Paradise Lost*. The postlapsarian Adam’s fear of “curses” on his “head,” reminding him of God’s “voice” that told the prelapsarian couple to “Increase and multiply,” is raised by God’s proto-Evangelical judgment: “Her Seed shall bruise thy head, thou bruise his heel.” The developing association between the “head” and “heel” is also suggested through wordplay on the *heel/hill* in the episode of the apocalyptic phase of the war in Heaven in which the fallen angels, “arm’d” like the new-born Sin, utter “a dolorous groan” when their “heads” are crushed down by the “Hills” which, hurled away at them by the obedient angels, fly “in the Air.” The image of the flying “Hills” in the apocalyptic vision of the fallen angels’ “capitis dolores” transforms itself into that of “the Laborer’s heel” in the last epic simile of *Paradise Lost* where the faithful angels descend “from the other Hill” in a “meteorous”—etymologically signifying “in the air”—movement. The

importance of the bodily image of the *hell/hill* in the last epic simile that announces the end of the world of *Paradise Lost* is brilliantly appreciated by William Blake, who never fails to recognize the critical problem of the human body: “Milton entering my Foot; I saw in the nether / Regions of the Imagination” We have yet to explore the textual labyrinth of “the nether / Regions of the Imagination” of the seventeenth-century great epic in order to historicize the modern concept of the human subject as a cultural construct of allegorical language.